
ありがとう

郷土史研究家・俳人 今坂柳二

あの頃、春雷がよく鳴っていたような気がする、天の意志であったか、誰かの信号でもあったか、そんなことを思っていた。いま考えると、さねとうあきらさんが、残った私たちに向かって呼びかけた魂の響きだったのかもしれない。そんな気がする。

第一回市民芸術祭の印象は遠のいたが、十回目の舞台には強い思い出がある。次々と執筆の下令がくるのだ。いまも、さやま・川の街合唱団の皆さんが歌ってくださる「春の神話」を始め、「狭山茶摘唄」「戦争子守唄」、それに朗読の「昔ばなし賛歌」。それらの依頼とお礼と感想と指摘が、丁寧な筆書きの手紙として送られてくるのだった。

俳人を名乗っているとはいえ、文章なんて習ったことも教わったこともない私にとって、それは鞭打ち励ますに十分なものだった。更に、万全な補筆に至る迄、春雷とその後の春風の如く私の心を打ち、充たしてくれた。

戦争童話と童句の土家由岐雄さん、詩人の吉野弘さん、創作民話のさねとうあきらさん。貴方たちと同時代に生きた幸せを噛みしめています。

ご訃報に接し、言葉もありません

選任理事 竹内 恵

第10回市民芸術祭の企画公演では、舞台上演用のオリジナル曲や効果音などの録音制作を担当させていただきましたが、さねとう先生には、寒い時期にもかかわらず小生の編集室にお出ましいただき、立会い編集で丁寧に演出指導を賜りました。

思い出すのは、「良いものが録音できました、良かった良かった」と微笑まれ、「それで、ここはこうするともっと良くなるね」と、常に肯定的な言葉で、編集上の微調整を指示されるお姿です。えらい先生だから厳しいのだろうと覚悟していたのですが、終始にこやかに、慈父の如く見守る姿勢でありました。思わしくない場合は「面白いですね、でもちょっとこんな風にしたらどうなりますか？」と、場を和ませつつ、先生の意図に沿うようリードしてくださいました。きつい言葉や威圧的な態度を示す方も少なくないこの業界で、こんな対応をしてくださる作家の先生は本当に珍しいと感服しました。

こんな感じで確か3回お出ましただいて、最終版のOKをいただいたと記憶します。振り返れば、自分の実力以上のものが出来ましたが、それはまさに先生のご指導の賜物です。(現在、文団連で刊行しているCDはこの時のものです)

お陰さまで小生も良い勉強をさせていただきました。

お帰り際に、次回作もお手伝いさせてくださいと申し上げたら、「楽しかったね。是非、近いうちまたね」と微笑まれましたが、今となっては、それが永いお別れのご挨拶になってしまいました。

小生が大好きな言葉があります。

「民族の歌を作らせたまえ。あとは誰が法律を作ろうが知ったことではない」18世紀のイギリスの政治学者(氏名は失念しました…)の言葉だそうです。法律に勝って、民の歌…と芸術家でなく政治学者が言っているのがポイントです。

その意味に於いて、さねとうあきら先生は、まさしく狭山の「民の歌」を残してくださいました。狭山の、地域の人々の心に歌文化。

志しある皆様に、現場人間が垣間見た故人の思い出をお分かちし、手向けの花に代えさせていただきます。

さねとうあきら先生に心から感謝し、ご家族の平安を祈るものです。 黙禱